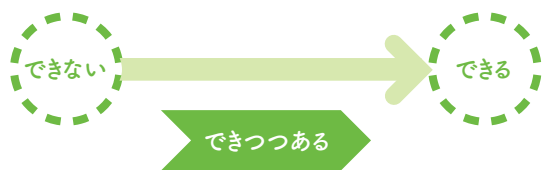


…………… 第5回  
**小中をつなぐ  
ポイント**

小中連携は、英語教育の大きな課題の一つです。この連載では6回に分け、小学校と中学校の学びをどうつないだらよいか、そのヒントを述べていきたいと思います。今回は、CAN-DOリストを使ったつなぎ方について、ご紹介します。

CAN-DOに関して具体的にお話しする前に、一つ確認しておきたいことがあります。それは、「CAN DO(できるようになる)」か「CANNOT DO(できない)」の二項対立で考えるのではなく、その間にある「できつつある」「こういう条件ならばできる」という途中段階を意識するということです。生徒が英語を習得できるまでには、下の図のように途中過程があることを常に忘れずにいることが大切です。



**1. 英語を使わせ、モニターする**

中学校の新入生向けに、4月の授業で行うべきことの一つは、生徒に英語を使わせてみることです。ここでいう「使わせてみる」には、アウトプットだけではなく、インプットやインタラクション(相互のやり取り)も入ります。

具体的には、先生が英語でSmall Talkをしたり、日常的な話題や小学校で学んだ話題で生徒とインタラクションを取ったりすることからスタートします。その際、補助教材『We Can!』の目次(※1)を見るとよいでしょう。小学校で学



※1『We Can! 2』目次



習してきたことを確認しながら、生徒がどのくらい理解できるか、またどのくらい英語を聞いて理解しようとする姿勢があるか(「わからない」とあきらめないか)などをモニターします。やり取りすることで、生徒がどれくらい応答することができるのか、どの表現や語彙は使うことができるのかなどもわかるでしょう。

また、生徒にペア・ワークをさせ、その様子をモニターすることで、生徒は何ができて、何ができつつあり、何ができないのかがわかります。このように、モニターしてわかったことを次回からの授業に生かすことができます。

さらに、小学校で使っていたCAN-DOリストを印刷し、生徒に自己評価させることも効果的です。それにより、中学校の出発点がわかり、授業づくりの第一歩がスタートできます。来年4月から使われる小学校英語教科書『Here We Go!』(光村図書)では、小学5・6年生でできるようになることをCAN-DOリストで示しており(※2)、振り返りにも活用できます。

**2. 小中の教員で思いを共有する**

英語研究会などで、小中学校の両方の先生方が集まる機会がある際には、次のことをおすすめします。それは、4技能5領域別に、お互いに児童生徒に何ができるようになってほしいか

を共有することです。ある自治体で私が行った「聞くこと」の例をもとに説明します。

まず、次のように問いかけます。小学校の先生方には「児童にどのような姿勢や力を身につけてもらい、中学校へ送り出したいですか」とたずね、中学校の先生方には「どのようにその姿勢や力を伸ばしていきたいですか」とたずねます。この後、先生方は話し合いをして、それらを共有します。私が行った例では、双方の先生方から次のような共通意見が挙がりました。

- 推測して聞く姿勢をもち、あきらめずに聞き続けることができる
- 概要を聞き取ることができる

小学校と中学校で同じ意見が出て、児童生徒が「聞くこと」に関してできるようになってほしいことが共有できました。こうして「英語を使ってできること(できつつあること)」を小中の双方が共有することで、CAN-DOで小中をつなぐことができます。また、CAN-DOを共有することで、授業の活動も同じ目標に向かうので、連携がしやすくなるでしょう。



※2『Here We Go!』, 6年生CAN-DOリスト p8

次号では、「授業づくりを振り返るポイント」についてご紹介します。

**小中連携のポイント**

**③ CAN-DOでつなぐ**

**POINT 1** 「生徒に使わせ、モニターする」  
(小学校での学びを確認する)

**POINT 2** 「小中の教員で思いを共有する」  
(どうやって送り出したか、どう伸ばしたいか)

**太田 洋**  
おおた・ひろし  
東京家政大学教授  
東京都生まれ。2002年東京学芸大学大学院修了。東京都の公立中学校、東京学芸大学附属世田谷中学校教諭、駒沢女子大学教授を経て現職。小学校英語教科書『Here We Go!』、中学校英語教科書『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE』(ともに光村図書)の編集委員を務める。